雑感　こんな「記述式」でよいのか?

■　11 月 10，11 日に行われたプレテストの IA について感想を，当雑感「第 2 回目プレテスト IA の感想」で述べた．

その中で記述問題に触れたが，3 題の記述問題は配点が 5 点ずつで，部分点が全くない．

私たちが記述式の試験を行うとき，必ずと言って良いほど採点における部分点を意識している．それは，完答できていなくても，途中までの推論や計算に評価すべきところがあれば，そこを評価すべきだという考えからである．もちろん，記述式の場合，配点も大きいことが多いので，All or Nothing では可哀想だとの思いもある．

■　今回のプレテストで，

第 1 問の〔1〕で「1 のみを要素にもつ集合は集合 A の部分集合である」という命題を記号で表記させる問題の正答 $\{1\} \subset A$ に対して，$1 \subset A$ や $(1) \subset A$ といった解答には，評価すべきポイントはないのだろうか．

確かに，「1 のみを要素にもつ集合」の表記方法は，数学的には間違いである．しかし，$\subset$ の記号を用いること，その向きが正しいことは評価できるのではないか．5 点中，1 点や 2 点程度の部分点をあげるという立場もあるだろう．

第 1 問の〔3〕の与条件を満たす階段の踏面の長さ x cm の範囲を不等式表示させる問題の正答 $26 \leqq x \leqq \dfrac{18}{\tan 33^\circ}$ に対して，「$26 \leqq$」の部分を忘れた $x \leqq \dfrac{18}{\tan 33^\circ}$ は，それなりに評価ポイントがある．5 点中，2 点程度を与えても良いとする立場を支持する．

第 2 問 (1) (iii) の三角形の面積に関する問題で，「各時刻における S_1, S_2, S_3 の間の大小関係と，その大小関係が時刻とともにどのように変化するか」の記述で，例えば「すべての t について $S_1 = S_2 = S_3$」では，確かに t の意味が不明であるということはあるにしても，「移動を開始してからの時間を t としたんだね」と私たちは忖度し，減点に止めることが多いのではなかろうか．単に「$S_1 = S_2 = S_3$」だって，若干ではあれ，部分点を与えてもおかしくはない．

■　考えてみれば，記述試験の採点は，積極的に評価ポイントを探すことと，忖度することで成り立っているように思う．その中で（わずかな場合もあるが）部分点として評価し採点していく．

そのために，最初に立てた採点基準を採点途中でも必要に応じて見直し，採点のやり直しなどを行うこともしばしばある．

こういったことを行わないのであるならば，記述式とは名ばかりで客観テストとあまり変わらない．

■　部分点についての考え方は，採点者によって大きく異なることが多い．10 点満点の問題で，ある不十分な解答を 8 点だという採点者もいれば，0 点だという採点者もいる．

そのために，基準の設定，すりあわせを行って対応している．それが面倒で煩雑だからと言う理由で，All or Nothing にしているのだとしたら，怠慢としか言いようがない．

完全解答でないと点が全くもらえない記述式ならば，最初から手を付けない受験生が多く出てしまうのではないか．

■　一方，つらつら考えてみるに，今回のような「記述問題」を私たち（教える側と大学側）は期待していたのだろうか．

確かに第 1 問の〔3〕や第 2 問(1)(iii)においては，解答すべきフォーマットが与えられていないし，その答を導いて行くプロセスも指定されていないという点では，従来の客観テストとは異なる．

でも，私たちが記述式で要求するのは，最終的な答えに至る道筋と最終的な答である．その推論過程や計算過程なども記述させて採点している．最後の答の記述だけを要求するこういった記述式とは，私たちが求めているものとは乖離しているように思えてならない．

過程まで記述させる試験はこのような大規模な試験では無理だ，という考えは理解できる．その通りである．

■　だから，改めて言いたい（当雑感 198「新テスト・記述式モデル問題を解いてみて」でも書いた）．

中途半端な記述式は止めて，各大学がきちんとした記述式の試験を行えばよいのだ．

大学側が，入試問題作りや採点から逃げていることが，こういった中途半端な記述式試験を作らせ，受験生を混乱させている最大の問題だと考える．

2018 年 12 月 01 日